

あります。新興のアメリカ合衆国の分類では地球科学の一つにまとめられてしまいましたが、イギリスなどの分類では、大英自然史博物館の地球科学部門の分類に代表されるように、地球惑星科学は鉱物学部門と古生物学部門の二つにわかれ、岩石学、鉱床学、地球化学、隕石学はすべて鉱物学部門に属しています。

ともあれ、現実に進行してできた大学院重点化した理学系研究科は、理学部教授会で合意された基幹理学院第三次素案とはかなり違ったものでありました。それにもかかわらず我々が重点化実現に努力したのは、とにかく大学院重点化するのが理学部の急務であり、それ以後も講座定員、講座制度などは以前のものを運用面で続けて行けるという合意を信じたからであります。われわれも積極的に協力し、定員を持ち出での広域理学大講座に「惑星物質進化論大講座」を提案し、関連委員会のヒアリングの投票で1位にランクされまし

た。

しかし、後になって重点化した時の定員表（東京大学理学系研究科大学院・理学部の再編整備、平成4年1月14日）を見ますと、新制大学院発足以来、小教室に認められていた助教授定員（昭和56年4月1日の教官配当定員表）が1名削減されていきました。新しい定員配分表は理学部人事を円滑に進めるため必要なことはもとよりよく知っているつもりであります。結局のところ、この助教授定員は内部借用ということで終着をみましたが、1つのディシプリンを守り発展させる小教室にとって、この1名の定員は重要であります。鉱物学教室は私が退官しますと一気に若がえりませ

この一文を書かせていただく機会に、この内部借用が不良借用として扱われないよう、最後にお願いをする次第であります。

送る言葉

田賀井 篤 平（天文学専攻）

武田弘先生は、鉱物学、結晶学、さらには惑星物質科学などの分野において多くの先駆的な輝かしい業績をあげられました。約25年前、日本ではほとんど研究者のいなかった隕石・月試料の研究を手がけられ、鉱物学の発展の一つの方向を示され、現在では講座名・書名など一般的に使われている「固体惑星物質科学」を提唱され、その分野の発展とともに歩んで来られました。例えば、炭素質隕石から原始のエコンドライトへの物質進化過程の提唱、ダイヤモンドを含むことで有名なユレーライト隕石の研究とそれに基づくユニークな生成モデル構築、特に、長年に亘るHEDエコンドライト隕石の研究は国際的にも非常に高く評価されており、この隕石グループの研究は、ほとん

ど先生によって発展させられてきたと言っても過言ではありません。母天体の原始地殻の形成進化、その内部構造のモデルは、実際に、この隕石グループの母天体であると言われている小惑星ベスタのリモートセンシングによる観測により見事に実証されました。欧米以外の研究者が提唱した名前が採用されることが少ないなかで、先生が提唱されたHED隕石という呼び名が定着していることが、先生の活躍を物語の一つと言えます。月の物質研究では、アポロの試料と南極から回収された月からきた隕石との比較を行い、アポロ以降の月研究をリードされ世界的にも高い評価を得ておりアポロ10周年の昭和54年には、米国航空宇宙局(NASA)から特別表彰を受けておられます。

また、国立極地研究所の南極隕石の分類・研究にも力を尽くされ日本の隕石研究の基盤作りから発展に貢献されました。さらに、将来の日本の惑星探査計画にもその豊富なアイデアを提供されています。

先生は地球惑星物質科学を研究の主眼に据える以前は、結晶学に重点を置いた研究をされていました。特に層状ケイ酸塩鉱物の基本となる雲母の多型について化学組成の変化と温度圧力条件の変化に対応する構造変化について系統的モデルを発見され、多くの多型の構造を決定し形成のモデルを提唱されました。この業績に対して、昭和45年に日本鉱物学会奨励賞を授与されています。なかでも、雲母のX線回折パターンの対称が雲母の結晶構造の対称よりも高くなることを示した研究で、鉱物学教室での数理結晶学の出発点になった研究でした。また先生は、現在でも多く使われているプログラムをアメリカから紹介・移植され、輝石の結晶構造を精密に決定され、結晶化学的な考察を厳密に行ってこられました。先生が惑星物質科学を広い視野で見つめることが出来たのは、先生の鉱物学・結晶学的な素養が大きく作用しているように感じます。

また、先生の語学の才能は特筆すべきで、真偽の程はさだかではありませんが、6ヵ国語を話せるという噂がありますが、メキシコでは通じなかったという報告もあります。しかし、速射砲のごとく英語で質問・議論をする姿を拝見すると、

どうやってマスターしたのかと驚嘆させられますが、持って生まれた才能といわざるを得ません。最近、初めて中国を訪れた際、事前の少しの勉強だけであったにもかかわらず、天才的だと褒められたと大変お喜びのご様子でした。

さて、先生は学問以外にも、好奇心旺盛ですが、特に最近の先生のワインに対する傾倒ぶりは大変なものです。有名なソムリエと交流されたり、フランスの5大シャトーのパーティに出席されたりしていらっしゃいます。あまりお酒が強くない先生が「最近ワインの研究をしているのだよ」と最初に言われたときは皆驚きました。先生は「良いワインの取れる場所には適切な気候と適切な土壌があり、自分は鉱物学的素養で土壌を調べたい。これは環境学に通じるのだ」と言われていました。私達はお酒の飲めない先生の照れ隠しだと思っていました。ところが最近、先生は今後は環境物質科学として鉱物の研究をする準ば、先生はワインを私達に振舞ってくださいますが、先生のワインの解説のなかに必ず土壌のことが出てきますし、海外へ出張されるときは（不思議にワインの名産地が訪問先に近いところにあります！）、必ずワインを味わいつつさまざまな試料を集めておられるようです。

どうぞ、これからもお元気でワインの研究をお続けください。研究の残りは私達が喜んで処分いたしますので。

